

10月のことば

～考える③ 学び～「気づき」その1

秋山を遠景から眺めると、草葉の色や樹緑の影で「装」という字に見える。つまり「山装う秋。」

山登りの楽しみ方は様々であるが、通なる者の味わい方は「気づき」。まず、日本の山が美しいということへの気づき。世界には多くの山があるものの、四季がなかったり、民度の低い国では無秩序な伐採や投棄あり。

次にその美しい日本の山を管理してくれる人達への気づき。植林は200年～300年後の子孫の為にすべき事であり、相続税を払いつつこつこつと心労を割く行ないには頭が下がる。又、危険・安全の為の看板・山道・山小屋の整備。樹林の中に入り道がわからなくなった時は、腰をかがめて心を静め四方を見渡すと、赤いテープが枝に付けられていて、そこに道がある。

この様な見えぬ人達の優しい配意に気づき出すと、更なる山の神が見えて来る。小さな植物、わずかな自然の移ろい、登る人が一つずつ小石を積み上げた塚、何やらゆかしい歴史の跡。尾根に吹く気持ちいい風。

そして、我が国はこれらの美しい山がある為に「水」というかけがえのない財産がある事に気づく。

日本の美称は「瑞穂^{びしょう}の国^{みずほ}」。日本の神々は自然であり、水があり五穀豊穰^{ごこくほうじょう}なる国。そこで求められるのは、権利の主張や理論の優劣で物を奪い合うことではなく、いくつかの感謝の心に気づいて“ありがとう”を言えるかである。その人に日本の神は降臨する。

当園は、金を持ってきても、論理主張が合っても「できぬものはできぬ。(協力を願う)」こともあり、金がなくとも、論理が正確に述べられずとも、気づきある感謝のことばで、「できぬものもする。」ところでありたく思う。

「山」一つにしても、かくの如き「気づき」一つで深い世界と思考に至る。生活において、仕事や人生の価値は、いくつ気づきがあり、どれだけ人に配慮ある事をしてあげられるかで決まる。

その気づきは決して教えられるものにあらず。自ら気づき、学ぶのである。「気づきは学び、学びは気づき。」

(～来月は、その気づきある人にどうすればなれるのか？を考えてみたく思います。)